

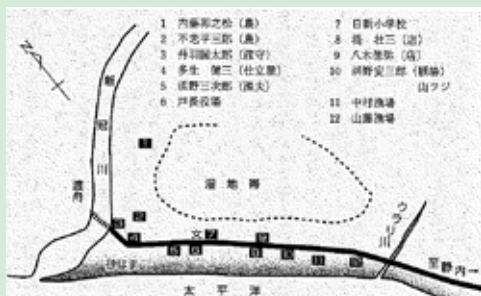
# 新冠にまつわるお話しを集めた 新冠百話

## 第二話

### 「明治14年頃の新冠」(要約文)

新冠町は、明治14年に初めて戸長役場が設置された年を「開基」としています。当時の役場の責任者である戸長は、「上林準太郎」という青森県出身の若干33歳の人物でした。この頃の新冠郡は、11の村がありました。記録によると、新冠郡全体で120戸、600人くらいの人口規模があったと推定されています。

当時の産業形態はどのような様子だったのでしょうか。各記録から読み解くと、農業は主要産物に、ヒエ、アワ、バレイシヨ、大豆などがあり、水稻は明治10年前後に初めて行われたようです。漁業は、現在の本町地区にあった中村漁場や山藤料場が繁栄



明治18年頃の新冠市街  
(新冠町史の記録から作成)

しており、イワシ、タラ、ナマコ、サケ、マスが多くとれていました。林業もこの頃からはじまつており、林木の払い下げに関する記録が残されています。商業では、毛皮や煙草、酒類を取扱う店があり、旅館を経営している人もいました。

前回の連載文で紹介した「新冠会所」は、この頃は「駅通所」と改められ、交通の拠点となっていました。交通のために使う馬を飼育していたり、新冠川の対岸を往来する渡舟業も行っていました。

明治18年、新冠で初めて学校が設置されます。地域住民の尽力により、現在の本町多目的交流センター付近に「日新小学校」が開校します。この学校は新冠小学校の前身となり、後に次々と開校する各学校の元になるものです。この頃、新冠の大部分は軍馬を育成する「新冠牧馬場」がすでに開設されています。当時、エゾオオカミの被害や、蝗(いなご)の大発生など、数々の惨事がありました。エドウィン・ダンというアメリカ人を招聘し、西洋農法を取り入れながら大規模に牧場を運営していました。

明治14年頃は、役場が設置され、各産業や教育が萌芽し、現在の新冠の基盤がこの頃に形成されたとも見てとれます。しかし、まだまだ情報不足の感もあり、今後の調査しだいでは新しい発見があるのかもしれない。

## シートベルトの全席着用

- 同乗者の着用はドライバーの義務
- 車外放出により致命傷の危険も
- エアバックは補助装置

静内警察署

### 火災・救急出動状況 ( ) かつこ内は前年同期

区分	火災件数	救急件数	
5月	0件(0件)	29件(18件)	
30年1~5月	0件(3件)	133件(105件)	

交通事故発生状況 ( ) かつこ内は前年同期			
区分	発生件数	死者	傷者
5月	2件(0件)	0人(0人)	2人(0人)
30年1~5月	4件(2件)	0人(0人)	5人(3人)

## 人のうごき

(平成30年5月末現在)

人口	5,602人	(前月比 - 2人)
男	2,747人	(前月比 + 4人)
女	2,855人	(前月比 - 6人)
世帯	2,765世帯	(前月比 + 1世帯)